

## 〔論文〕

## 『プライドと偏見』における共に生きる〈形〉

The Form of Life Together in *PRIDE AND PREJUDICE*

上野 正二

本稿は、別論文として仕立てている『プライドと偏見』を読むための教養」の第四章、「善き共生について——コリンズ家の同居生活およびダーシー家の共同生活——アリストテレス『ニコマコス倫理学』第八・九巻との対比」を別立てて論じておこうという試みである。

問題点を初めに先取りして言えば、コリンズ家における「共生」が果たして共同生活と言えるかどうか、というところにある。経済的依存と牧師の職業柄の妻帯という依存の他は、ただの同居人ではないのか。それに対比されるダーシーとエリザベスが形成して行こうとしている家庭は、まさに共同生活の場であり、「共同の生」の形を問題にすることが出来るのである。このことを、アリストテレスのよく知られた「友愛論」を導きとして論じて行こうというのである。

## 第一節 コリンズ

## コリンズ氏の登場

『プライドと偏見』の冒頭句は、「相当の財産を持っている独身の男なら、きっと奥さんを欲しがっているに違いないというのは、普く

知られている真理である。」というものであった。これは、作家が愚劣な考え方としてこれから大いに嗤ってやろうとしている連中に共通の「真理」である。決してまともな人間には該当することのない事柄であるから、手放しには「真理」などとは呼べないのであるが。

さて、この詰まらぬ「真理」に該当する人物としては、その女性版を体現するベネット夫人、シャーロット・ルーカスなど多数が登場するのだが、この項の主人公であるコリンズも取り落とすことの出来ない重要人物である。彼の登場してくる次第は、次のようであった。

ベネット家に（おそらくベネット氏の）従兄弟のコリンズから来訪を予告する手紙をよこしてくる。彼はベネット家に男子の相続人が誕生せぬ場合にはこれを相続することになっている〈限定相続人〉である。その手紙は、これまで親どうしが互いに反目してきたために自分も疎遠にしていたが、自分はキャサリン・ダ・バークの後押しで教区牧師になった、牧師としてあらゆる家族に平和の祝福を増進することが義務である、ついでにはベネット家とも、財産相続人として、ベネットの娘の権利を守りたい（つまりベネット家の娘のうちの誰かと結婚すれば、両家まるくおさまる）、異存がなければ訪問したい、というものであった。

近所に越してきた金持ちの青年と恋仲にある長女、ジェーンはこの手紙に判断のしようのないところを認めながらも一応は好意的に受け取っているが、さしずめコリンズの相手に相応しいと（たとえば母親から）思われるエリザベスの判断は厳しい。手っ取り早く言えば変わり者のバカ者だ、と思っているのだ（60, 106）。三人目は手紙の主の意図を判断するところまでは行かず、文体の善し悪し論で立ち止まり、他の二人は全く興味を示さない。こういうのが、娘たちの態度であった。

あるいは、父親であるベネット氏によれば、「利口の正反対の人間のような気がしてならないんだ。手紙には卑屈なところと尊大なところが混ざり合っていて出ているところを見ても、どうもそうらしい」(60, 105)。卑屈と尊大が混ざり合うというのは、実際に会ってみると、ダ・バーク夫人への尊敬、崇拜と自分を良く思う心と、聖職にある者の権利・牧師の権利を大したものだと思う心の混合(65, 113-4)として表れる。この場合、ダ・バーク夫人への尊敬、崇拜というのは、そういう仕方での謙遜というのもあり得るのだが、彼の場合には実は〈卑屈〉なのであり、牧師の職にある者の権利を大したものと思う心というのは、まさに尊大なのである(同)。いずれも、徳・卓越性としてのプライドでもなければ徳としての謙遜でもない。それが成立する原理・原因としては、眼が真に崇敬するものへと拓かれないための拘りであると言わねばならないだろう(註：ベルクソンの『笑い』参照)。

コリンズの受けた教育(自己修練の欠如)(65, 113)

コリンズはたしかに利口な男ではなかった。その生まれつきの欠陥は、教育や交際でも少しも補われることがなかった。教育によつて補われることがなかったというのは、教育を受けなかったということである。父親は教えた。だが、それは無学で欲張りな父親の〈関与〉にすぎなかった。大学にも入ったが、それはただ必要な期間出席したというだけで、educated(つまり、この世のしがらみから抜け出た)人間になるということではなかったのである。

このような男が、自然傾向性として女性に対してどうであったか、ということに関しては作家は触れてはいない。だが、たまたま社会的に高い地位にあるダ・バーク夫人の知遇を得て、今や思いもかけなかったことながら経済的な安定を得た。こうして、彼は今やあの〈普

遍的に承認された真理〉に該当する人間になった。「今では立派な家があり、収入も多いので、彼は結婚しようと思った」(65, 114)という訳である。こうして、結婚が第一の目的であれば、コリンズ氏は登場したそもそのものはじめから、〈共生〉を志向する男であると思われるかもしれない。しかし、どうやら彼の場合には〈共同の生活〉という意味での〈共生〉は怪しいのである。我々は先ず第一には、彼の結婚観を考察に上らせねばならないであろう。

コリンズ氏の恋愛・結婚観

最初の晩には、彼の意中には長女のジェーンがあつた。だが翌朝の朝飯前にベネット夫人から、ジェーンについてはもうすぐ婚約が整いそうだと伝えられると、彼女が「火を掻き回している間に」、今度は次女のエリザベスを対象にすぐ替えた(66, 116)。

コリンズのエリザベスへの求婚(XIX.)

エリザベスは、初めからこのとんま男には何の積極的関心も抱かず、自分が妻選びの対象にされるのは迷惑でしかなかった。それを露骨に表情に表す彼女に、コリンズはしつこく迫るのだった。口説きの文句と言えるのか疑問であるが、彼の語ったバカげた内証話はこうである。「この問題について自分の感情に走る前に、結婚する理由と、妻えらびにハーフォードシアへやって来た理由とお話するほうがいいと思う」(100, 117)。つまりコリンズには「結婚をしようとする理由」なるものがあると言うのだ。だが、感情はおいてけぼりである。もちろん、エリザベスはこれを可笑しいと思う(同)。

彼の「結婚する理由」は、①「暮らし向きの楽な牧師は、教区で結婚の実例を示すことが正しいことだと考えるから」②「結婚すれば大いに幸せがますから」③「パトロンの(ダ・バーク夫人)が勧めてくれたから」④その内容は「私(ダ・バーク夫人)のために立派な人を選

んで下さい。そしてご自分のためにも、あまり教育の高くない、すこしの収入でも上手にやっていたりけるような、働きのある役に立つような人にしてほしい」(100-1,171-2)。と、うようなものであった。⑤おまけに「上流階級の人物の前に出るとどうしても黙りがちになり敬意を払うようになるから、あなたの機知と快活もちようどほどよくなるでしょう」(101,172)と言うのだった。最後に、ベネット一家から妻を選ぶ理由として、「娘たちの損失をなるべく少なくすること」(101,173)が挙げられる。これは実はただの口実にすぎず、本心はきれいな従姉妹がいるというのがそれである。その証拠には、結局はだれよりも彼を買っていたメアリ(119,201)までは行かず、ルーカス嬢シャーロットへと華麗なる転進を果たすのである。

さて、右に「感情はにおいてけほりである」と書いた。結婚をのぞむ男子において、愛欲というにせよ愛情というにせよ、そういう感情に先立たれない結婚願望というものがあつたらしく、その一例がこのコリンズ氏に見られるのである。結婚することの正しさだの利便性だのをあげた最後に、彼は言う。「さてあとは、ただ最も生気にみちた言葉で、僕の愛情の烈しさをあなたに保証すればいいわけです」(101,173)。

後に触れるダーシーの場合には、口説きの言葉にたしかに異様さはあるものの、エリザベスに告白するに至るプロセスを一貫しているのは、狂気としての愛情であつた。結婚に至る困難な道程を歩き通せたのは、狂気に導かれた愛情を具体的な行動に具現することによってであつた。だが、これに極めて好対照的に、コリンズは愛情を口にはしたが、口先だけのものであつた。

## 第二節 シャーロット・ルーカスのこと

コリンズのしつこい話の聞き役を、はじめは親切心からエリザベスに代わって引き受けていたのがエリザベスの友だちのシャーロットだった。だが、やがて「彼女の親切心はエリザベスの思いもよらぬところまで進展した。それというのも彼女の親切の目的が、コリンズの求婚を自分の方へ引き取って、エリザベスには二度と言ひ寄らないようにすることに他ならなかつたからだ」(116,196)。

そうしてコリンズに対して自らの期待するところの極めて僅かであることと、同じくコリンズの彼女に期待するところの極めて控えめであることのお陰で、コリンズがエリザベスに二度目のプロポーズを断られた翌々日に、電撃的なスピードで婚約が調うこととなつた。「三日のうちに二度も結婚の申し込みをしたということもずいぶんへんな話だけれど、その申し込みを承諾した人があるということに比べれば、まだものの数ではなかつた」(120,203)。そのシャーロット・ルーカス、彼女はどのような女性であつたろうか？

シャーロットの人となり

シャーロットの父親、ウイリアム・ルーカスはメリトンという小さな町で商売をしていたのが、財産を作り市長を務めている間に宮廷に伺候したことから子爵に叙せられた人物である(14,3)。彼はこのことをのみ誇りとしており、社交上の世辞 compliment を生き甲斐にしているような男であつたが(22,44)、夫人の健康にロンドンの空氣が気になるばかりに、上流社会を離れている(同)のであつた。

シャーロットはルーカス夫妻の数人の子供の長子で「ものわりのうす sensible 頭のうす intelligent 娘で、年頃は二十七歳ぐらゐ」(15,32)。——*めいこめ、ハル*は作家がそう記しているのであるが、

これから見ていく彼女が、果たして *sensible* で *intelligent* だと言えるのか、筆者には疑問である。「ものわかりがよい」とは「シャーロットのようにものわかりがよすぎること」である、と作家は言っているのかもしれないが。彼女はまず、ダーシーのプライドに関して、「ほかの人の高慢とちがって、わたしにはそう気にさわりませんわ。ちゃんと理由があるんですもの。誰だって、あれだけ立派な青年で、家柄がよく財産があつて、何から何まで心のままなら、気位が高くなるのは、ちっとも不思議じゃありませんもの。あの方は誇り高くある権利があるんだわ *he has a right to be proud*」(16.35)と述べていた。それは、彼女の関心が相手の品位に対してあるのではなく、容貌、家柄や財産にのみあることが示されている。高邁と傲慢という、一つは徳の、もう一つは不徳の意味を持つ「プライド」は、もともと人柄の善し悪しを示すものであつたのだが。それをかく述べることによって、彼女の人柄が何処で成り立っているかも明らかになる。

#### シャーロットの結婚観

さて、肝心のシャーロットの恋愛・結婚観はどうであろうか。愛情について語っている箇所、こういう条りがある。「私たちは誰でも自由に始めることが出来るのよ。だけど、ちよつといいなと惹かれるのはほんとうに自然なだけで、背中を押してもらわなくても本当に愛することになつちゃうほど十分な情熱を持っている人つてごく少ないのよ」(18.32)。だから女性も少しオーバーに自己表現して、実際以上に愛情を見せる方がいい、というのである。

だが、果たして人間が自由に愛し始めることが出来るとは、一体どういうことなのだろうか。人を愛するということは主体的な働きかけなのであるから、自分が愛するかどうかの出発点を左右する権限を持つ、とでも言うのであろうか。そんな厄介な問題をこの女性作家が提

示する気遣いはない、と思う向きがあるとしたら、それは間違いであろう。次の、「ビングリーさんは、まちがいなしにあなたのお姉さんが好きですよ。だけど、お姉さんのほうから助け船を出してあげなくっちゃあ、それ以上には決して行けないかも知れないわ」(同)という文章は、右の文章と比例関係にある。この最初の「ビングリーさんは、まちがいなしにあなたのお姉さんが好きですよ」は、ビングリーが姉さんに動かされて好きになつてゐる、というのではなく、ビングリーの愛情の出発点は彼の自己決定でそうなつてゐる、と言おうとしているであらう。だが、後に繰り返し触れなければならないように、こういう考え方が明白になる。ダーシーの見解との比較で、退けられるべきものであることが明白になる。人間の意志のことは各々の人に権能があつて始まるのではないのである。たとえば、ダーシーは恋の狂気に抗いながら遂にこれに服さざるを得なかつた人間であつた(178.298)。彼は〈理解 *understanding*〉の面では自分に主導権があると思つてゐるが、〈気質 *temper*〉の面では、はじめから保証の限りではないことを宣言している(53.95)のである。

シャーロットは、恋愛をその始まりも自分の自由にし、最後まで自分の意思でやり遂げようとしてゐるのである。だが、これほど〈恋愛〉に疎遠な女性も珍しいであらう。

#### 第三節 コリンズとシャーロットの結びつき

この作品の第二章は、コリンズとシャーロットの結びつきを揶揄して、この作品を世界文学の最高傑作としてゐる箇所であらう。エブリマンズライブラリー版では二二六頁に四箇所も作家の諧謔心が遺憾なく發揮されている。

シャーロットはコリンズの「それほどの〈愛と雄弁 love and eloquence〉が彼女を待ち構えているとはあえて期待もしなかった」という(116, 197)のだが、それは事実コリンズは立派な愛情表明などしなかったということであり、「コリンズの長話が許すほどの短い時間で、万事双方の満足するように話し合いがついた」(同)というのは、無駄口を叩いている間に、両者の関心事を満たす仕方での結婚への話し合いがついた、というのである。

シャーロットの側では、もともとコリンズが口にする彼女への〈愛情〉は、彼の想像上のものにすぎないと踏んでいた(117, 198)し、彼女自身の求めるところはただ「結婚すること」「自己(117, 198)——「世帯を持ちたいという純粹な私心のない欲望から(116, 197)」、また「男とか夫婦生活とかいうことには重きをおかな<sup>ら</sup>ず without thinking highly either of men or of matrimony」(117, 198)——であつた。この小説の冒頭に置かれた悲しい真理の女性バージョンとなる名文句がある。

「結婚が、高い教育をうけた財産のない若い女性にとっては、唯一のあつぱれな生活の備えであり、幸福を与えてくれるかどうかはいかに不確かでも、欠乏から最も愉快に守ってくれるものであつた」(117, 198)。

こうなると、「結婚すること自体が目的である」とも言えないことになる。結婚は彼女にとっては安楽な生活のための手段、最良の手段と考えられている訳である。翌朝報告に来たシャーロットに、「シャーロット、うそでしょ!」と叫んだエリザベスには、こういう結婚は想像することも難しいことであつた。シャーロットの結婚観は、先に述べたように彼女の考えとは違ふのはつねづね感じていたものの、「世間的な利益 worldly advantage のためにもっといい考え better feeling

をすべて犠牲にしてしまふなどということがあり得るとは想像だにし得なかつた」(120, 203)と述べている。彼女にとっては、世間的な利益よりも優先しなければならぬことがある。恋愛感情はその一つである。右に見たように、恋愛感情は自分が恋をしようと思つて生じる、という筋のものでもないし、自分で勝手に処理することが出来るものでもない。恋も結婚も、この問題では自然を無視し(vt 130, 219)意志によつて処理しようというような無理が先立つ時、「楽しい家庭 comfortable home」を実現することには結びつかない、と作家は考えていよう。「その友だちが選んだ運命によつて、その友だちにとつてはそこそこのしあわせであること to be tolerably happy も不可能だという痛ましい確信が、加わつた」(120, 203)と記されている。

エリザベスは、「想像できるだけの限り全ての幸福 her all imaginable happiness」(120, 202)をシャーロットのために願うのだが、果たして次章に述べるような生活がそのへしあわせであり得ようか。シャーロットは六章で、「結婚における幸福 happiness はまったく運次第よ。もし二人の氣質が互いによく知られてゐたつて、前もつて似通つてゐたつて、それが幸福 felicity を増進させたりなんかしないのよ——」(19, 39)と述べている。幸福というものが、人間にとつて至高のものを手にしたときの人間の窮極の目的であるとすれば、<sup>レ</sup>徳を目当てにする恋愛においては必ず見られる「幸福の形」が、シャーロットにおいては欠落しているのだ(『ニコマコス倫理学』VIII, 3)。すると、結婚しさえすれば人間は幸せになる、などという見解はオースティンのものでは決してないことは明らかである。中野好夫氏がオースティンの作品を「彼女の小説は人をたのしませる文学であつて、人生いかに生きべきかだとか——深刻な問題と対決した文学ではな

い」と言い、「彼女の小説がほとんどすべて目出度く結婚で終わるな  
ども、ずいぶん甘いといえはいえる——」<sup>(五)</sup>と言っているのが如何に  
的外れであるか、自ずから明らかであろう。

#### 第四節 どのような生活が彼らを待っているか

愚かさを暴露したために尊敬もできなくなり(120.203)これま  
での心やすさも失ったエリザベスに、シャーロットは是非とも新居を  
訪問してくれるように頼む。エリザベスは彼女との過去のためにつ  
き合いを続ける(138.233)ことにし、叔父叔母と旅行に出る途上  
彼らの新居に滞在し、この一対のおかしな夫婦の生活ぶりをつぶさに  
観察することになる。

エリザベスは、先ずシャーロットの歓迎を受けて、来てよかったと  
思うが、次いで気づくのはコリンズの態度が変わっていないことで  
あった(147.248)、と記されている。変わらないのはシャーロット  
も同様である。我々は、作家がこの記述で何を言おうとしているのか、  
と注意しなければならぬだろう。人は、この赤の他人との共同生活  
である結婚によって、それまでの個々人の生活形態とは大幅な変化を  
遂げる必要がある、また変わるものなのである。

シャーロットについていえば、

「(エリザベスは)こんなつれあいと一緒に暮らしていて、いかにも  
楽しそうな様子をしているのを、不思議に思つて眺めた」  
(147.8,248)と記されている。「楽しい家庭」がほしかった(120.202)  
というのはここに関わる訳なのだが、「こんなつれあいと一緒に暮ら  
していて」というのは、いうまでもなく「愚鈍な」ということであり、  
「利口な人でも感じのいい人でもなく」「一緒にいれば退屈な」

(117.198)人である。また、「妻としてみれば恥ずかしいと思うの  
も無理もないようなことを口にし」「(妻である彼女が)顔を赤らめ」  
ねばならないような、そんな人物である。それでいて彼女は どうして  
《いかにも楽しそうな》様子をして居られるのか？その謎は、次々に  
明かされることになる。いま触れた顔を赤らめねばならぬような場面  
では、「シャーロットは賢明にもたいていは聞かないようにしていた」  
(148.249)、して居ることができた——これもよくよく考察してみ  
ればおそるべきことであろう——ということである。しかし、決定  
的な理由は、シャーロットがいわば今日で言うところの《家庭内離婚》  
をしていたことにある。新婚早々である。エリザベスは、コリンズ  
氏と離れて——コリンズのことを忘れて——二人で家の中を案内し  
てもらっていると、家の造りがよく便利に出来ていて、万事をこぎれ  
いに調和を保って配置してただけでなく、コリンズのことを忘れる  
ことができる、と「実際そこら中に気安い風が行きわたった。そして、  
シャーロットが眼に見えてそれを楽しんでいるのを見て、エリザベス  
はコリンズ氏はきつとおり忘れられることがあるのだ、と想像し  
た」(149.250)のだった。他人が他家の不快な男を忘れるのは少し  
も問題ではないが、妻が、しかも新婚間もない妻が夫を忘れてそれを  
楽しんでいるとは！

さて、エリザベスに「ある生き生きとした想像 living imagination が  
生まれてきたとおりに(150.251)<sup>(六)</sup>長逗留をしていると、さらに面  
白い光景が展開されることになった。それは、エリザベスの抱いたも  
う一つの疑念が解けると同時に明らかになるのだ。「エリザベスは  
はじめのうちは、シャーロットはなぜ食事の部屋を居間にしないのだ  
ろうかと不審に思っていた。その方が大ききさも手頃だし、見晴らし  
もずっとよかった。けれどもまもなく彼女は、彼女の友は立派な理由

があつてそうしたのだということをさとした。というのは、もし彼らがコリンズ氏の部屋と同じようにせいせいした部屋にいたら、彼はきつと自分の部屋に腰が落ち着かないにちがいないからであつた」(159, 266)。

もとより、シャーロットの結婚は愛情に始まったものではなかつた。第一の目的は彼女自身の世間並みな生活をする事、いいかえると経済的安定、にあつた。コリンズは彼女にとつてはただの生活の手段に過ぎないのだ。これは、嗤いの視点を持つてゐる者にとつては、共生論の基礎理論としての友愛論にも場所を持たない不完全な生の典型である。家庭というものはなく、二人はただ生活のほんの一部を利用し合い、提供しあつてゐる存在、いわば「共生」者に過ぎないのである。このこと自体、彼らの家庭が初めから崩壊しており、二人がすでに裁かれてゐることを示してゐるのだが、それは外見的にも崩壊することは時間の問題であらう。小説の末尾に、エリザベスとダーシーの結婚を喜んでゐたシャーロットが、この縁組みに激怒してゐるダ・バーグ婦人の引き起こす嵐を避けるためにルーカス邸に身を寄せることになつたのである(363, 268)。そこには、コリンズ夫妻が来た、と記してゐるが、コリンズ氏はこれでは教会様が危なくなるし、彼にとつてはシャーロットよりもダ・バーグ夫人の方が大事である。この先どうなるかは火を見るよりも明らかだらう。

ちなみに、以上に論じたコリンズとシャーロットの関わりは、狂気の絡まない白面の(もう少しで「慾ボケの」となる)関係であつたが、一方のたとえば男性が単なる狂気の恋に捉えられ他方の恋される者から受け容れられる場合の悲惨に關しては、『バイドロス』238E-240Bを参照。プラトンなど引き合いに出さなくても、多くの人が自分に該当することとして自覺してゐるはずだが、現実にはそう

ではないのだ。

では、ダーシーとエリザベスの生活はどうなるであらうか？

これを考えるためには、彼ら二人のこれまでの言動を分析しておくと同時に、本来の共同生活(すなわちよき共同生活)がいかにすれば成り立つかを考察しておかなければならないだらう。

## 第五節 愛の共同生活の形 ニコマコス倫理学第八・九巻の考察

アリストテレスは『ニコマコス倫理学』第八巻・九巻で、人間の共同生活がどのような仕方において最も優れた在り方をするのかを考察している。おそらくは「J・オースティン」もその教養として念頭に置いていたであらうこの箇所が、どういふものであつたかを手短かに検討しておきたい。

そもそも「友愛」を論じる理由は何かという、それが徳と切り離されないものであるという以外に、我々の生活に対してこれほど欠くべからざるものはないから、であると言ひ、親愛なる人々が居なくては自分の持つ権勢も護持されたいし、親愛なる人々は貧困や悲運の際の避難所であり、若年者には過失の防止のために、老人には介護のために、盛年の者にはうるわしい行為遂行の助けとなる、という理由が挙げられる。さらに愛は国内を結ぶ紐帯であつて、愛は正義よりも必要だと思われるといつた理由も挙がる。要するに、親愛なる人との共同生活がいろいろな意味での生の拠り所となるからだと言ふのである。だが、友愛はそれ自体うるわしいものであると言へるのか(徳であるのか)、役に立つとして、何の役に立つのか、真に生の拠り所になるのか、という問題が生じることになる。そこで先ず、友愛とはいか

なるものか、を愛されるものの三種類、もしくは愛の動機の種類三種類の検討から考察して行く。愛には三つの形態があり、それは①善（ここではまだ「最高善」というものは論じられて居らず、人柄の善さのときもの）を目当てにした愛、②快を目当てにした愛、および③快もしくは何らかの善を手に入れるに有用なものを目当てにした愛の三種である（二章 1156b-）。

有用さのゆえに相手を愛するひとは、相手の人自身を愛するのではなく、自分にとつての或る善が相手方から与えられる限りで愛するのであり、快楽の故の愛も同様である。こうしてこの二つの愛は、相手がある性格の人だという理由で愛しているのではなく、自分にとつての善の故である。これらを「非本来的な愛」と呼んでいる。これらの愛は、相手が快や利益を与えてくれる限りで愛するのであるから、相手がそういう者でなくなれば解消しやすい愛である——こういう愛は、類似的になぞらえてそう呼ばれるだけで、本来「愛」の名に値しないと、言われる（1157a30）。これに対して、相手をまさにすぐれた人として（或る場合には、すぐれた人になるようにと——というの）、人間的な卓越性のゆえに相手方を愛する人々は、お互いの幸福をはかることに熱心である」というのが真の愛の特徴（1162b）なのだからである。愛する愛は「究極的な愛」であり、このような愛は相互的となり、また永続的なものである。この人々の愛には、同時に快も有用性も含まれることになる（三章）。

快楽のための愛（恋愛における愛はこういうものだ、とアリストテレスはいう）も有用性のための愛も、しかし昵懇の間柄になり、また互いが目覚めて本当に相手のことを思うようになれば、究極的な愛に近づく（四章）。

ところで、『ニコマコス倫理学』第九巻では、自己愛が他者を愛す

る原理であり、共同生活の原理であると述べているように思われる。というのは、他者を真に愛する人とは、「善と思われるものを相手の為に願ひ行う人」、「相手の存在と生を相手の為に願う人」、「共に時を過ごす人」、「相手と意図を同じくする人」、「悩みや悦びを共にする人」だと言えるが、そういう諸点は、すぐれた人が自らにおいて有していることを相手に願うのだからだ。こうして一つの重要なことがらが押さえられる。「善き人は自愛的でなければならぬ」（八章<sup>1163</sup>）。自愛的であることによって、諸々のうるわしいことがらをなして自らも利益を受けるのみならず他の人々をも利するからである<sup>1163</sup>。

では、最も自愛的であるとはどのようにしてあり得るのか。これについては、「友愛論」のこの箇所よりも、第十巻を検討するべきであろう。人間は幸福という自己の最高の善を実現するためには、神とも呼ばれる「最高善」を問題にしなければならないのである。最高善に関わる活動は「観照的活動」であるが、ここにこそわれわれの（知性の）最高の活動があり、また連続的な活動があり、純粋性と安定性との両方で最高の快楽があり、自足的であるのだからである（七章）。だが、この神である最高善を見ることが、プラトンが神的狂気に割り当てたすぐれた活動であると言わなければならないだろう。

そこでもう一度、善き共同の生についての論を振り返ってみると、真の愛、友愛とは「善が目当ての愛」なのであるが、それがいかなることかを突き詰めれば、自らが最高善に触れ最も充足することを志しながら互いに相手にも最高善との関わりを願うことによって成り立つものであることになる。こういう愛が、どのように動き始めるかについては、『バイドロス』でと同じようにはアリストテレス『ニコマコス倫理学』では自明な論としては論じられてはいない<sup>1164</sup>。



## 第六節 ダーシーとエリザベスの言動分析

ダーシーが傲慢な人間ではなく、むしろ高邁という大きな心の人間であるという点については筆者はすでに繰り返し述べた。彼は、八章で《教養》を論じる箇所、「広く本を読んで、心を向上させ、本質的なものを加えねばなりませんね」(36.66)と述べ、「徳に氣遣う人間であることを示している。そのような「徳に氣を遣う人間」に特有な、共同生活に関する見解は、どのように考えられるのか、というの

が、以下の考察の眼目である。

(1) 徳に氣遣う者の恋愛観。これについても繰り返し述べることになるが、ビングリーの恋に干渉してジェーンを諦めさせるよう働きかけた際、その理由となったのは、ビングリーがこれまでになく相手を愛しているのは分かったが、一方相手方のジェーンに然したる恋の兆候が見られないということであった。ダーシーは自分自身が恋の狂氣に取り憑かれ決定的な方向付けをするように、友人にもその相手にも狂氣の愛情を要求するのであった。ただ、この狂氣は「徳に氣遣う者」の狂氣である限りは、ただの狂氣ではない。

(2) この愛の動機について。「愛の動機」なるものをダーシーの場合に問うことができるだろうか。できる。ダーシーの恋の始まるきっかけは、彼女の機知、あるいは彼女の合理性を越えた行動形態であった。

最初会った時には、彼はエリザベスをきれいだとは思わなかった。美的判断を下そうとも思わなかった。次に会った時(ダンスパーティーの席)には、少しは氣になったとみえて「ただ批評するために彼女を見た」結果として、彼女の目鼻立ちには一つとして取り柄がないと判断したのだが、ビングリーにそう語った直後に「彼女の黒い眼の美し

い表情が顔全体をなみなみならず聡明に見せていることに氣付き始め」、それにつづいて次々と「同じように当惑させられることが發見された」(30.40)のだった。彼女の体つきに均斉の欠けていることを發見してきたが、容姿の軽快で感じがよいこと、作法が上流階級のものではないが軽快で馴れたことは認めざるを得なかった。そこから始まって、次第に昵懇の間柄となるにしたがって、当のエリザベスは偏見によってダーシーに対する嫌悪の情を深めるのだが、ダーシーの方は彼女の精神の深みを覗く機会を得る。

たとえば、姉のジェーンがビングリー嬢に招かれて馬で訪問し雨に濡れて発熱したと報せの入った際、妹のメアリーとの間に次のような会話がある。三マイルの距離を馬が使えないので歩いて行くことにして、エリザベスが言う「ちゃんとした目的があれば、距離なんか問題じゃありませんわ。たった三マイルですから。夕飯までには帰ってきます」。「あなたの思い遣りの深いのには頭が下がるわ。でも、衝動力は理性に導かれなきゃだめだわ。わたしの思うには、力を行使するのはいつも必要に対応した程度にでなきゃいけないわ」(36.54)、とメアリー。ダーシーはこれを聞いた訳ではないのだが、衣服をよごし到着したエリザベスをビングリーの妹たちが軽蔑するのに対して、ダーシーは「運動のため上氣した彼女の顔色のうつくしさに心を打たれる一方で、一人でこんなに遠くまで歩いてくる何かちゃんとした理由があるのだろうかという疑念に半分心を奪われていた」(36.55)と記されている。ダーシーは、彼女と同類の人間であり、メアリーのように理性の判断にすべてを牛耳られるような生き方を良しとは思わないのであった。疑念を抱いたダーシーは、そこを把握したのだ、と思われる。人を行為へと動かすもの(目的)が何であるかというのが、人を判断する肝心の点であるのだが、エリザベスの行動は自分の行動の仕方と

同じであることをダーシーは見取。そして、そういうものがダーシーをエリザベスへとぐいぐいと牽き行くのだ。機知についても、ダーシーはエリザベスの遣り方を知っている。

機知・嗤いの問題にしても理性を越えた行為の問題にしても、これはアリストテレスから知られるように、神的なものを第一にした生き方に関わるものである。ダーシーの恋情は、そのような「へるわしさ」を目処にした恋情なのであった。プラトンの『パイドロス』260dで明示されるころでは、生ける彼女の姿に御幸の際の美しい光景を想起して目くらめくのである。

彼および彼女の個人としての生全体がこのように一つのものに向けられているということは、彼らが相手を思い遣るというのは、自分の目指しているものを追いかける友を得るということであり、一人の追究を共同の生活として強化することを意味するだろう。

(3) おかしな愛の告白の意味するもの。ダーシーがエリザベスに愛の告白をする際の、その語り方は、確かに異様であろう。

その始まりの「努力したが無駄だった。うまくゆかない。私の気持ちは抑えつけておけない。私に言わせてくれねばならぬ、私がどんなに熱烈にあなたを崇拜し、あなたを愛しているかを」(178.298)というのは、それだけでも奇妙である。自分はあなたが好きなのだが、気持ちは抑えつけておこうと努力した、奮闘した、というのである。だが、その理由の如何によつては、相手の愛を勝ち得るために最大の成果を挙げること可能であろう。たとえば、自分とあなたとは好み相反だ、これでは今後うまくやっていけるとは思われない、というような理由である。それで気持ちは抑えつけようと奮闘したのだが、好きだという気持ちはどうしても抑えつけることが出来ない、だから自分の好みを引つ込めてでもあなたを最大限尊重したい、などという

演説である。これならば、気持ちは抑えつけようと努力したがだめだったというのは、自分の気持ちが如何に熱烈であるかを伝えるために(修辭的)効果が大きいと思われる。だが、ダーシーが気持ちを抑えつけようとした理由は、そうではない。また、恋情としての気持ちは抑えきれずに告白するのだが、その他の気持ちを転換するつもりがあるというのではない。こうなると、全くおかしな話になる。

「それで彼は、彼女をどう思っているか、長い間どう思っていたかを告白した。上手に話した、だが彼の心に感じていること以外にも詳しく話さねばならぬいろいろの気持ちがありながら、そういう tenderness の話題に関してはプライドを示すほど旨くは語れなかった」(同)。「詳しく話さねばならぬいろいろの気持ち」とは、「そういう tenderness の話題」といいかえられる「愛情」である。——それはうまく語れなかったという。ではエリザベスが黙っている間にうまく語ったのはどういう事柄か？それが次に述べられる。①エリザベスの身分が低いという気持ち、②それが自分の品位を落とすことになるという気持ち、③エリザベスの家庭的障礙を考えるとただ本人が好きなだけではいいとは言ひ切れぬダーシーの気持ち。——これらの判断はいつも自分の愛情の傾いて行くのに反対して来た——これらの気持ち(tenderness)が情熱を以て長々と語られた。「だが、この情熱は、彼を今みずから傷つけつつある社会的重大な結果をもたらすように思えるが、求婚を有利にするとは思えなかった」(178.299)と記されている。

なぜこのような「暴挙」に出たのであろうか。彼にはこれは暴挙とも思えなかったのだらうか。後日談を見ると、ダーシーはこれを非常識なこと、暴挙、とは思っていなかったようである。ではなぜこういう言動に出たのか？

彼がここで語っていることがらは、エリザベスの耳で聞けば、彼が傲慢な人間であることを示す以外の何ものでもないのだが、この時点のダーシー自身にしてみればただの冷静な自己分析の結果であり、相反する方向での引力が自分を引き裂く苦しみを訴えているだけのことである（全く拮抗した利害であれば、黙っている方を選んだであろうが、愛情の方が勝ったので告白する方を選んだのだ）。自分の傲慢さを「正直に」訴えて理解を求めようとしている、といった解釈の可能性もあるだろうが、筆者はとらない。

(4) しかし、ダーシーの手紙に関しては、彼の弁解にも似た仕方は、他ならぬ「徳に氣遣う」者の遣り方に相応しく、正義を真ん中に据えての言論であるという点を明確にしておく必要がある。すなわち、彼はこの手紙を前の夜の不快な告白のむしかえしをするために書くのではなく、「わたしの（正義を求める……上野）性格が私にこの手紙を書かせあなたに読んでいただくことを要求しさえせば、骨折ってこんな手紙は書かなくて済んだ」のだし、「あなたの正義のためにこの手紙を読んで下さることを私は要求します I demand it of your justice」(185, 308-9) と述べている。これは何の話か、と不思議にも思わぬ読者もいるだろうが、これはダーシーの愛が如何なるものであるかを示しているのである。「愛」というものは国内を結ぶ紐帯の役割を果たすものであるかのごとくであり、立法者たちの関心も、正義によりもむしろこうした愛に存しているように思われる」とか、「もし人々がお互いに親愛的でさえあれば何ら正義なるものを必要としない」がゆえに「正義の最高のものは愛という性質をもったものにほかならない」(『ニコモコス』81) と、いわれるけれども、愛自体がいかなる性質の愛であるか、すなわち永続的な愛であるか解消しやすい愛であるかは、その愛が何に基づいているかに拠って決まるのである。

そして、快や有用性に着目して成立する愛は相手方に快や有用性が失われれば解消するのに対して、無条件の善さに基づいて、有徳な人間によって徳を目指して成り立つ愛は永続するのである。言うなれば、枢要徳の一つに挙げられる正義を不可欠の要素とする愛は、そういう仕方での愛の種・形相を明示されるのである。

(5) ダーシーの振る舞いが何を目的として成り立っているか、という問題を別の角度から見ると、次のように述べる事が出来る。ダーシーは自らの生い立ちを述べる箇所で、「私は実践原理 principle においてはそうではないのですが実践そのもの practice において生涯利己主義者 selfish being でした」(349, 244) と言う。彼の行動はたしかに叔母であるキャサリン・ダ・バークによく似たところがあると言われ、「自分の思いを何としても遂げる」(336, 222 など) というのを信条にしているかのようなのである。しかし、この二人の行動原理は似てはいるがまるで違うものなのであった。

彼等には他人の思惑にしがたって生きる「他人本位」というような生き方はなかった。「私は両親に駄目にされて——彼等は私を利己的で横柄で、親族以外の者のことは気にせず、世間の人たちを軽蔑するように、少なくとも自分の分別や価値に比べて世間の人たちの軽蔑しようとするようにと、放任し、奨励し、教え込みさえしたのです」(349, 244) とさえ、ダーシーは言っている。実際にどうであったかは、ダーシーの場合にはだいたいお割引して聞くべきであろうが、ダ・バーク夫人の場合にはそのままに振る舞っていることになる。彼女にあるのは「自分の思いを何としても遂げる固い決心」(336, 222)、これは日常の生活では意識にも上らずにいるのだが、そういう自分の思い通りが通用すると思っている。以下、夫人の「利己的な考え方は悉くダーシーの考え方ではないし、エリザベスの批判的な見解が

ダーシーのそれと同じであるから、幾つかの特徴ある言葉を拾い上げておこう。

イ、ダ・バーク夫人とダーシー夫人が許嫁の黙約をしているので、是非それを実現せねばならぬと言う夫人に対して、「あなた達二人は結婚の計画に可能な限り尽力なさったのです。でも、その完成は、他のもの次第なのです」(335,221)。他のもの(複数)の一つとして神が想定されていないだろうか。

ロ、運命の力と言い換えれば分かり易いかも知れぬ右の「他のものの力」によって、誰が選ばれるかは不定であるところ、どうして自分ではないいけないのか、と問うエリザベスに、「それは、名誉が、礼節が、賢慮が、いえ、利益が、そうです利益が禁じるのです」(335,222)。ハ、自分はこれまで誰の気紛れにも屈従したことがない、自分は誰が何と言っても決心は曲げない、という夫人に、「それでは、奥様の現在のお立場は、いっそう気の毒なことになるではありませんか」(336,223)。いっそう気の毒なことになる、とはどういう意味だろうか。自分で自分の頭の上に重しを載せる業だ、という意味でなくて、二、婚約はまだしていないと言うエリザベスに、以後決して婚約することなどしないと約束してくれと求める夫人に対して、「私はそんな約束はしません。そんな全く筋の通らない so wholly unreasonable ことを脅されて引き受ける者ではありません。奥様はダーシーさんにお嬢さんと結婚して貰いたがっておられます。でも、私がお望みのお約束をしたところで、それでお二人の結婚が少しでもより有望になりやすかしら?」(337,224)。

これらを並べてダーシーの見解を構成しようとする、と、「本当の自己」を中心にした利己主義<sup>エゴイズム</sup>とでもいうものが、滲み上がって来るだろう。

これは、結局はエリザベスのきつい非難のお陰だというのが、傲慢を謙遜に置き換えたダーシーの姿が現れる。しかし、既に見てきたようにダーシーの「プライド」は傲慢というべきものではなく、高邁の徳であった。では、ここに「謙遜」が強調される意味は何であるのか、一考を要するであろう。彼は「私は principle においてではないが practice において生涯利己主義者 selfish being でした」(349,244)と述べていたように、頭では利己主義者として振る舞おうとしていたのではなかった。むしろ、彼の自分で作り上げた教養によって、目指すべきものを目指し軽蔑すべきものは軽蔑しようと思っていたであろう。それが、現実の行動においてそのようにまっぴき仕方は動いていなかったことを、エリザベスの非難はみごとに剔りだしたのだった。もともと、彼は高邁な人物として(ということは、本来向かうべきものに向かっていることが第一である)「全然またはほとんどなにものをも要求せず、自らすすんでひとびとの役に立つ」人物であった。それが愛する天女の女性の傲慢を咎める一言で、一段と自覚的な行動の人になるばかりでなく、「謙遜」に関してさらに深い思索を余儀なくされるのである。どうして、恋の相手の非難がこういう働きをするのかについては、別に論じよう。

傲慢を徹底的に袂り出すとどうなるか? 自己免許の正義を立てることも、これは傲慢であることが判明する。ここから先は、アリストテレスに欠落しているという訳ではないが、むしろキリスト教の影響が色濃くなる。「高ぶった思いを抱かず、かえって低い者たちと交わることがよい」(ロマ12,16)。また、「兄弟たちよ。そういうわけで、神のあわれみによってあなたがたに勧める。あなたがたのからだを、神に喜ばれる、生きた、聖なる供え物としてささげなさい。それがあなたがたのなすべき霊的な礼拝である」(ロマ12,1)。それにまた、キリ

スト者は、イエス・キリストを通して、またイエス・キリストにおいて交わりの中にあることを告げられる。それは第一に、一人のキリスト者はイエス・キリストのために他のキリスト者を必要とすることを意味し、また第二に、一人のキリスト者は、ただイエス・キリストを通してのみ、他のキリスト者に至るということの意味するのである。このようなことを、牧師であるコリンズは解し得ずとも、日ごとに義に飢え渴くようになった「謙遜」の人には解し得るのである。<sup>(19)</sup>

#### エリザベスの言動

ダーシーの恋は、いつから始まったのかと問われて、「始めたことに気づかないうちに僕はもう(狂気の)真ん中にいた」(359, 362)と言わざるを得なかったにせよ、自分から恋を認めざるを得なくなり告白するに至ったのだったが、結婚への意志に関してエリザベスの側の愛 affection は、初めに偏見による憎しみ、嫌悪感があつたのを別にしても、まるで受け身であつたと言わねばならない。

彼女はいきなりダーシーの愛の告白を受けるまで、ダーシーが自分を愛していることも知らなければ、自分がダーシーを愛することになるなど夢にも思っていなかった。そして、何しろ深い偏見に引きずられて、告白するダーシーに悪態をついた後も、自分の非難が根柢のないものであつたことが分かり、ダーシーが尊敬に値する男だと感じるようになって、彼女はダーシー(の愛)を受け容れる気にはなれなかった(201, 335)し、プロポーズを断つたことを後悔する気持ちなど一瞬もなかった(同)。

次いで、偏見を取り去って見聞きすると、たとえばダーシー家の家政婦レイノルズの話などで、これまでのダーシーへの評価がごとく覆るとともに、ダーシーがなお自分を愛してくれているのを知ると、次の四つの点を確認する(247-78)。<sup>(20)</sup>①もはやダーシーを憎んでは

いないこと、②彼に嫌悪を感じたことすらもう久しく恥じていること、③彼の善や valuable quality を確認することによって尊敬がもう何の反撥を感じぬものになっていること、④そして何よりも、彼に good will を抱く動機となつたのは、感謝 gratitude だつたこと。この最後の感謝は、何に対するものかというところ、イ、彼女を愛してくれたこと、口、自分の非礼、あらぬ非難までことごとく忘れてなお愛してくれること、ハ、さらに自分の身内の者にまで想像を絶した態度を取ってくれること、に對するものであつた。後に末妹リディアの駆け落ち問題に奔走してくれたことを知って、この感謝はさらに大きなものとなる。

ところで、作家は、この「感謝に基づく愛情」と呼ぶべきものを、この作品では強調していると見なければならぬ。「もし感謝と尊敬が愛情のよき基盤であるならば、エリザベスの気持ちの変化はあり得ないことでもなければ間違ひでもないであろう。しかし、もしそうでなければ、つまり、一目惚れとか二言も交わさぬうちに逆上せ上がったと言われるようなものと比べて、そのような始まり方をする思慕が不条理であり不自然であるならば、彼女を弁護して言い得ることは次のことしかない。すなわち、彼女は前者のやり方をウィカムへの依怙鼠眉でちよつと試みてみたんだ、だけどそれが旨く行かなかつたんだから、彼女はきつともう一方の面白くない方の愛し方を模索せざるを得なくなつたんだ。」(260-1, 99)

彼女は決して「感謝に基づく愛情」が不合理だとか不自然だとか言っているのではなく、それが立派な人間の恋の在り方であることを表明しているのだ。その上で持ち前の諧謔を弄しているだけなのだ。テキストの明証としては、右に挙げた箇所がまさにそうなのである。では思想的にはどうだろうか？それが先に見た『パイドロス』によると、善き人に恋された者は、相手のやさしさに打たれ、彼に比べれば他の

の総ての者の友愛はもの数に入らぬことを知る——そしてついに、恋されている者の魂を恋で満たすことになる。<sup>(二一三)</sup>この恋されて恋することを知る者は、「徳を目当てにした恋である限りにおいて、やはり「愛する人を力の限りを尽くして自分に、ひいては自分の尊崇する神に、できるだけ完全に似た人間にしようとする努力あるのみ」(同「6」となるのだ。この箇所を、テキストにオースティンに語らせれば、「またエリザベスとしては、ジェーンがビングリーに寄せているような思慕ではないにしても、少なくとも同じくらい当然の正しい思慕を寄せている人なのだ」(315,187)となる。

ところで、ここに来て順序を元に戻して、ダーシーが「徳を目当てにした恋」の人であったことを論じ直さねばならないだろう。そういう人物ならば、その恋の相手であるエリザベスも徳の人であることが明示されねばならないであろうからである。ところが、エリザベスの場合、はじめからずっとダーシーに強い偏見を抱き続け、ビングリー嬢らを憎み、悪口、皮肉をとばし、ウイカム、あのウイカムによるめきかけ(84,144)、まあこの小説が映画になった場面を想像すれば、妹たちと少しも変わらぬダンス好き、交際好きのミーハーでしかないのではないか。しかし、映画をではなく、小説を繰り返し読むことによって、我々はいよいよ明らかに、この女主人公が——作家の最も好んだ人物であったことを反映して——根本的に人格として、人格を形成すべき方向に向いた人物であったことを確信せざるを得なくなる。論点として、彼女の結婚観、教養観、および利己主義観を取り上げることができるであろう。

イ、教養観について述べると、すでに触れたダーシーの教養観を示す一文、「広く本を読んで、心を向上させ、本質的なものを加えねばなりませんね」(36,66)とエリザベスの見解は離れていない。ただダー

シーはミス・ビングリーが挙げた数々の技芸、外国語能力その他を修めていることを当然視するダーシーに反して、寧ろそういう能力よりも彼が最後に挙げた「本質的なもの」を重視しているところに違いがある。教養ある(ここでは accomplished)人間に不可欠なものは、絵画、ピアノ、ヴァイオリン、唱歌などといった技芸の総てや近代外国語を手当たり次第に身につけることではあり得ない。「あなたの方のおっしゃる教養ある女性というお考えの中には沢山のことを混ぜ合わせねばなりませんのね?」(35,66)とは、そういう批判を込めた問いであった。彼女の教養観に欠落させることのできないのは、むしろ「本当に大事なものの substantial」であり、これを欠落させれば「教育上の大失態 great mismanagement in the education」を生じる。<sup>(二一四)</sup>つまり人間としての「善 goodness」(212,22)を欠落するのである。この小説にはそのような不可欠な「本質的なもの」が何であるかなどという野暮な議論はしていないが、それこそ作者に笑われたくない読者は知っていなければいけないことなのである。

ロ、利己主義 selfishness については、これもエリザベスはダーシーと同じように「自分はとても利己主義的な人間です」(345,237)と言うが、ここで彼女の言おうとするのは、自分は相手の気分を害すかも知れないことでも言って、気分をせいせいしたい、そういう人間だということだけのことである。自分だけよければ他は顧みるつもりはないという意味のものでもなければ、他人を立てて自らを虚しくするという立派な考えに対する利己主義を主張するでもない。しいて意味づけをすれば「礼儀を先立てない」ということは述べてもいいだろう。そのエリザベスが、二人の人物の利己主義を批判する箇所がある。ひとつはシャーロット・ルーカスに対するもので、姉ジェーンに語る箇所である。シャーロットがコリンズとの結婚を決めたことを好意的

に受けとめるジェーンに、「あなたは一個人のために原理原則と完全性の意味を変えて、利己主義は賢慮で危険に対する鈍さは幸福のための安全弁だなどと自分もしくは私を納得させようとしてはいけないわー」(128-9, 216-7)と言う。賢い人だったはずのシャーロットなのに「考え方を知らなう cannot have a proper way of thinking」(128, 216)というのである。これはシャーロットの結婚への選択全体を批判するもので、愛情の不在と人間理解の不在をひっくり返して「利己主義」と呼んでいると解される。ではその「利己主義」に対する「愛情の伴う正しい考え方」とはいかなるものであろうか。理性的であることが当然そういう正しい考え方であるかのようなのであるが、エリザベスにおいてはそれでは不足なのだ。理性が働けばいいのではなく、理性が正しく働かなければならない。そのためには理性は自らが仕える目的を見失ってはならない。これを理性に示すのが愛情だ、ということになる。エリザベスが繰り返し愛情のない結婚を問題視するのはそのためである。典型的な言葉は、叔母であるガーディナー夫人に対して「誰にも不作法になること general incivility が恋の本質ではないでしょうか」(134, 225)と言うところに見られる。だが、彼女の恋の不作法はリディアの場合とは異なる。その違いは、この段階でエリザベスは神的恋の何たるかを解しているところにある。

もう一つの利己主義批判の箇所は、ダ・バーク夫人のダーシーと婚約をしないと約束をせよという箇所である。ここでは申し出を受け容れないエリザベスの方が「情けの分からぬ身勝手な娘 unfeeling, selfish girl」(338, 225)と非難されているのだが、エリザベスは「私はそんな全く筋の通らない so wholly unreasonable ことを脅されて引き受ける者ではなう」(337, 224)と答えているし、「私はただ、自分に何の関係もないあなたにもまた何人にもかかわらず、自分の幸福

に役立つと、そう自分が思う、そういう仕方で行動すると決心しているのです」(338, 226)と言う。このように一部を引き出すと、これも利己主義の一表現かと思われるかも知れないが、これはダーシーの利己主義と同じく夫人のものはまるで別ものである。自分の思いを遂げるために相手の、まだ決心というものでもない、気持ちを曲げよと要求するダ・バーク夫人の生き方、考え方(自己の牢獄に閉じこもった利己主義)自体を否定するエリザベスの利己主義は、自分に権能のあることがらに關してのみ力を振るい、権能のないことがらに關しては受け容れるという態度である(個人の意志と、それを越えた意志による成り行きとの区別)。ダーシーといかにも似た者同士ということになろう。ちなみに、お前がダーシーと一緒にいるなら、関係者のみんなから非難され、軽蔑され、卑しめられるに決まっている(335, 221)、と脅迫する夫人に対して、エリザベスは「それは大変な不幸ですね。でもダーシーさんの妻なら、彼女の立場に必ず付随する特別な幸福の源泉 extraordinary sources of happiness を持つにちがいありませんから、全体的に言って彼女は悔やむようなことはありませんね」(335, 222)と述べている。ここで言われている、ダーシーの妻たる立場に付随する特別な幸福の源泉とは、ベネット夫人だのシャーロットだのには、他のことはどうでも、とにかく金が使えなこと」を想定するだろうが、そういうものではない。この時期のエリザベスはもうダーシーの人となりをほぼ全て飲み込んでいたのである。すると、ダーシーは本当にものの分かる人であり、「モノが分かる」というのは、人間の幸福の真の根源に開眼していることでなくてはならないであろう。すると、右の意味は「ダーシーを愛し、ダーシーの思いを共有するほどの人物ならば、同じくその人の幸福の形たるものを得ることが出来るにちがいない」ということ意外にはあり得ないこ

とになろう。

## 第七節、結語 共同生活の行方

ダーシーとエリザベスの共同生活がどのようになるか、その行き先は来し方を振り返れば見えてこよう。すると、エマ・テナントという女性の書いた『ペンバリー館』<sup>(三十一)</sup>が如何にオースティンに対して偏見に満ちているかというような問題に仕立ててもいいだろう。

エリザベスは、ダーシーへの感謝から発した恋におちこんで、しかもダーシーがさらに進化したことは知らないままに、自分の恋が成就するとは思えない状態で、次のように書かれている。「彼女は今になって分かった。彼はまさに、性格と才能において自分に最も相応しい人だ。彼の知能と気質は、彼女自身のと似てはいないが、彼女の望みに全て答えてくれただろう。きつと二人に都合のよかったにちがいない縁組みだったのだ。彼女の気楽さと快活さによって彼の心は和らげられ、彼の態度はよくなっただろうし、彼の判断力と知識によって世間知によつて、彼女はより重要な恩恵を受けたに違いない」(33, 150)。また、「しかし、今やもうそんな幸福な結婚をして、びっくりしている多くの人に結婚生活の幸せというものが本当にどういうものであるかを教えることは出来なかった」(同)と付け加えられている。では、結婚がうまく行った今や、どういう幸福を教えてくれるのか、見なくてはなるまい。

本稿第四節では、結婚によつて始まる共同生活が、結婚についてどのような見解を抱いているかによつて変わってくる、或る場合には共同生活は初めから崩壊している、共同生活は始まりもしない、ということ、コリンズ夫妻の例において述べた。しかし、注意して読めば、

この二人の場合も(コリンズの挨拶にあるように、二人は心も考えも同じ)似たもの同士で、家の内でこそシャーロットはコリンズを避けているが、ロージングズを訪ねたりその他なにやかやとコリンズに伴い協力している。外に向かつて家族という単位で共同している、と言えるのではないだろうか。これがどうも怪しいと見る向きは、彼等の場合に外に向かつて何の共同をしているのか、と考えるに違いない。彼等は互いに自分の牢獄に閉じこもりながら相手を利用している、利便の共同生活に過ぎない。これに対して、まともな共同生活は、外に向かつて内に向かつて善さの共同生活なのだ、と。

では、ダーシー一家の行く末はどのような占いを考えるよりは、さきに来し方を見たダーシーの見解の結論部を見るにしくはないであろう。たしかに、ダーシーの場合には、想像を逞しくすれば、バイロンと同じように古典教養の愛好からギリシア愛国主義運動に身を投じたり、時代設定を18世紀にさかのぼってフランス革命に私財をなげうって協力するといった展開も考えられる。これもキリスト教的な展開であり得るのであるが、堅実な楽しい想像としては先のキリスト教の深化の方向で、真の共同の生が考えられなければならないであろう。

キリスト者は、自分の義化をもちや自分自身で実現することはできない。それはイエス・キリストによつて、イエスの言葉によつてのみもたらされるのである。してみれば、キリスト者はいつも他のキリスト者を、お互いの救いのよきおとずれ(福音)を持ち来たる者として必要としているのである。また、キリスト者が兄弟を愛する時、それはキリストを通してのみすえ通りたる愛となるのである。この兄弟愛が貧しければ、それだけ彼は神の憐れみと愛によつて生きることが少なくなるのである。ただ、共生論としての本稿の結論として必要なこ



とは次のような点を押さえておくことであろう。ダーシーとエリザベスは、こころやすい間柄になることによって、性格形成に進歩を遂げた。しかし、それでも双方共に交わりにもたれ掛かったのではなかった。一人で居て目指す方を見定めることの出来ない者には交わりは要しななければならないことになるのである。

しかし、この言葉で先ず思うことは、今日の若い人たちであれ、私たちよりはるかに年上の人たちであれ、知っているような一つの状態、すなわち群れのことである。私たちの「幸福」という避けることの出来ない、また避けることの不要な第一の問題に直面するとき、対面するのは、多数で同時にという訳には行かないのであって、各々が一人で向かわなければならぬのだが、私たちは極めてしばしば、群れの一人として安直にこの問題に向かうのである。そのために、幸福の条件・根拠をなしている者の声が聞こえてこないという大変な間違いを犯してしまう。じつさい、この道は狭き門を通らねばならず、友人と手と手を携えて笑いながら通ることによって、すでに、無門の門、道ならぬ道であることが忘却されてしまうのである。「忘却されてしまふ」と書いたが、私たちは歩く前にこの道がこのような道であることなど知りはしない。ひとりで問題に直面して一つの真理に向かって歩いているときに、ものをなるべく携えず、歌を歌わず黙して——自らが孤なる者であることを知り戦うときに初めて、私の真の存在の根拠、幸福の根拠は私たちが探すに先だつて向こうから来ていたことに気付かされるのである。このようであるから、独りで居ることに耐えられぬ者には、恐らく決して、神を見ることが幸福であることも許されはしないであろう。だからこそ、この事実を知らず、独りで居ることにより、根拠に出遭ったことのない者は、他者との交わりにも（真の交わりには）入ることが出来ない——独りの者はそれを知っているのに。

るのに。したがって、交わりにはいること、交わることは、順序が大事故であつて、これを誤ると、群れることを交わることに勘違いし、群れることのうちに幸福があると思ひなしてしまうのである。

## 〇六・七・七

### 註

一、このように言う場合、筆者はダーシー、エリザベスをこれに該当しない人物であると見ている。しかし、その意味は、彼らが異性に惹かれることがないというものではない。細君、もしくは夫となる人物を手に入れることを最先に欲しているとは言えぬ、という意味である。自然傾向性に即しているか否かの考察は重大であるが、自然傾向性そのものについては、ここでは考察の埒外なのである。

二、この女性版の言表は、117,198にある。本稿第三節を参照されたい。

三、先の数字は *everyman's Library* 版の頁数、後の数字は岩波文庫版の該当箇所を参考のために挙げている。以下同じ。

四、それが果たして口説きという性質のものであつたかどうかについては、後述第六節(3)を参照。

五、新潮文庫『自負と偏見』六〇四頁。

六、彼らは変わらない。子供のまゝのおとな、子供大人なのである。

七、ただし、実はこれは何を示しているのか、決定的な判断ではない。むしろ我々に想像しやすいのは、ダーシーの叔母であるキャサリンと接することによって、高慢ちきのダーシーのアホらしさが発見出来るのではないか、という〈想像〉であろう。

八、ここにキャサリン・ダ・バークのロージングズ邸からの招待のを加えないければ、コリンズの得意さ(151,254)が完成しないのだが、割愛せざるを得ない。

九、『ニコマコス倫理学』第八卷二章見よ。友愛の三つの条件の②には、「相互に相手のための善を願ふこと」が挙げられている。不完全な友愛においてすら、

相手の快楽、相手の利益を思つてやるということがあるのだが (1150b 30)、  
コリンズにもシャーロットにもその問題場面である愛が問題になっていないの  
である。

十、ただし、現代の共生論では、このような互いにそつばを向き合つて利用し合つ  
ているような在り方を、多元的共生と呼び、その存在を当然のものとして認め  
ているが、こういう共生論自体が、欠陥理論であることを暴露しているであらう。  
十一、尤も、シャーロットがエリザベスの結婚に賛成だったからといって、家を  
空けるとは考え難いのであるが。

十二、よろずの振る舞いに自分を勘定に入れずという宮澤賢治的な人間もいる。  
だが、賢治の安心立命の上になつてゐる祈り・願いを、自己確立もままならぬ  
人間が模倣することは、嗤いの対象となる。こうした人々のよかれと思つて他  
人になしていることは、ほとんどの場合には相手をスポイルしている。イエス  
が (あなたは立つて歩けるのだから) 立つて歩けというのは逆に、立つてい  
る者を寝せ、寝ている者を眠り込ませるのである。

十三、すぐれた人は一人で居ることが出来ることによつて、交わりをも善くする  
ことが出来るのだ。

十四、しかし、言うまでもなく、徳がいかに形成されるかをめぐつて論じられて  
いる『ニコマコス倫理学』では、究極目的である最高善との関わりが終始最も  
重要なテーマであつて、神とも呼ばれる最高善を視野に入れずには、徳もよき  
共同の生も論じることが出来ないのである。

十五、嗤いについては、「気紛れなことやつじつまのあわないことは——なるだけ  
嗤つてやるようにしています」という 53.94 を参照。プラトンの『ピレポス』  
二十九章では、滑稽を論じるのに嗤わうべき劣悪な性質として対象的にのみ取  
り扱われているが、アリストテレスは滑稽を、見聞きする者との関係でも論じ  
ている。そもそも喜劇は劣悪な人間を、悲劇は優れた人間を描く、と看破した  
のは『詩学』のアリストテレスであつた。

十六、ここに筆者は、「自己本位」という漱石の言葉 (岩波書店『漱石全集』第十  
六巻、五九六頁) を念頭においてゐる。この自己本位という立場は、その究極  
の在り方として「則天去私」とおなじものであつたと理解している。

十七、『ニコマコス倫理学』IV.3、あるいは「ペタイ」23.11-12 参照。ウイカ

ムの邪な語りを通してさえ、ダーシーは惜しげもなく金を出し、ふるまいをなし、  
借地人を助け、貧乏人を救う人であつた。77.132

十八、ここに必要な限りで仄示しておく、『バイドロス』の述べるように、「……  
だから、各人はいまや美しい人たちを恋するにあたつて、それぞれ自分の性格  
にしたがつて恋の相手を選択し、そして選んだ相手その人を神とみなしつつ、  
崇敬し礼拝するためにいわば自分の聖像として仕立て上げ、飾るのである。か  
くして、まずゼウスの従者であつた人々は、自分たちの恋する者の魂が、何か  
ゼウスに似ていることを求める。そして彼らは愛知の、また主人のような性質  
をさがしとめ、それを見いだしてその人を愛するならば、全力を尽くして彼  
にそのような性格を与えるのだ。自分たちがもし前もつて愛知の営みの経験が  
なければ、何某かのことを教えてくれることの出来る相手なら誰からでも学ぶ  
のである……」(52d) という文章を上げておくことができる。

十九、ここにいるイエス・キリストとは、あのナザレのイエスに先だつて来ており、  
彼に神の子の自覚を起こさせた神、また、我々の足下にも来ており我々を働か  
せる神である。漱石は、十九世紀の英国では、職業牧師たちはまさに職業的に  
教義を口にする状態であつたことを記している。ここに記した謎のような文章は、  
自己の存在自体が、自分で置いたものではない、自己の働きは、己が善くてそ  
のように働き得るのではない、ということを知り得るものには受け容れること  
が出来てあらう。ちなみにこの見解はボン・ハッファー『共に生きる生活』  
(Gemeinsames Leben, 邦訳、森野善右衛門、新教出版社) から貰つてゐる。Band 3 *Gemeinsames*

二十、この辺りの記事に関しては、筆者はあの放蕩息子の子の譬えを思い出さずには  
おれない。

二十一、If gratitude and esteem are good foundation of affection, Elizabeth's  
change of sentiment will be neither improbable nor faulty. But if otherwise,  
— if the regard springing from such sources is unreasonable or unnatural in  
comparison of what is so often described as arising on a first interview with  
its object, and even before two words have been exchanged — nothing can be  
said in her defence, except that she had given somewhat of a trial to the lat-  
ter method, in her partiality for Wickham, and that its ill success

might, perhaps, authorize her to seek the other less interesting mode of attachment.

二十二、悪しき人に恋された場合には感謝とはならぬ。なぜか。悪しき者、バカ者は悪しき者に恋するのであり、そこで昵懇の間柄になっても害のみ与えられるのだからだ。

二十三、255b~d

二十四、ソクラテスにおける人間教育が、各々の専門家の技術・知識と区別されていた点を考え合わせなければならないであろう。後者を全て修めることは不可能であるし、その必要もないのだ。

二十五、本稿十二頁、註十六参照

二十六、Emma Tennant, *PEMBERLEY*, Hader et Sloughton, 1993. 邦訳は筑摩書房九六年刊、小野寺健訳。A Sequel to *PRIDE AND PREJUDICE* と副題が付いている。